比喩的身振りに見られるイメージ

── 認知意味論的考察 ──

西　尾　　新

Consideration to Images Appearing into Metaphorical Gestures

NISHIO Arata

問　題

一般的に，私たちは話に熱中すればするほど，身振り手振りの発現頻度は多く，その動作は大きくなり，自分がどのような身振りを行っているのかに対して注意が払われることはほとんどない。しかし，この発話者本人にもほとんど自覚されずに生成されている身振りも，その発現する位置，手の動きと方向，手の形などから詳細に検討してみると，ある種の身振りは発話のイメージや意味に忠実に対応し，そのわずかな違いに応じて「演じ」分けられていることがわかる(McNeill, 1987/1990)。このような発話の意味と密接に関連した身振りは表象的身振りといわれ，現在，発話生成過程との関連を中心に議論されている（McNeill, 1987/1990, 1992；Kita, 1993；Rauscher, F. H., Krauss, R. M., and Chen, Y., 1996)。

このような議論の中で近年，この身振りが表すイメージと，Johnson, M. や Lakkof, G. (Lakoff & Johnson, 1980/1986; Lakoff, 1987/1993; Johnson 1987/1991）らによって提唱された認知意味論におけるイメージ図式との関連が注目され始めており，「キネシクス（kinesics）と言語学的意味論の統合は，心理言語学に限らず，生物学的研究や人類学にあっても広く実証的研究が希求され始めた領域」(辻，1997）であると言われている。また，McNeill は，認知意味論に関して，特に比喩的身振りとの関連を示唆している（McNeill, 1992: p263)。

そこで本論では，Johnson, M. の認知意味論における「イメージ図式」とその「隠喩的投射」という概念を簡単に紹介し，次に筆者が収集した身振りと発話の観察記録の中から認知意味論との関連から考えて興味深い事例をもとに，比喩的な身振りとその発話の関係を検討することを目的とする。その際具体的には，①身振りが表す発話部位，②話者間で共通する身振り，③一話者の一連の発話で共通する身振りを検討しながら，比喩的な身振りが発話の意味とどのように関連するかを認知意味論の視点から考える。

認知意味論とは

●イメージ図式（image scheme）

私たちは日常生活の中で，さまざまに環境と関わり合いながら生きている。そしてその関わりは，常に力が作用する場において実行され，力の場を通して私たちはそれを知覚する。それは，対象に対する私たちの力の作用であり，またその対象からの反作用であり，力の作用を可能にする摩擦であり，われわれの身体を定位する基準としての重力である。

このように様々な形で力に遭遇する場において，個々に異なる状況の中にも繰り返し現れる共通な力のパターンが存在する。Johnson, M.（1987/1991）はそのようなものの一つとして，“more is up”というパターンを挙げた。即ち，「砂の山を作る」，「コップに水を注ぐ」，「お風呂に水を張る」，「積み木を積む」などのように，そこで扱われる素材，その状況は全く異なるものでありながら，個々の場面の中に“より多いは上”という，共通のパターンが存在する。このような繰り返し現れる力のパターンから“抽出された”イメージをJohnsonはイメージ図式と呼んだ。彼によれば，イメージ図式とは「行動・知覚・概念作用のような動的な秩序づけの活動にそなわる，反復されるパターン，形，規則正しさのことである」（Johnson, 1987/1991 p99-100）。私たちが「給料が上がる」，「人気が下がる」，「物価が上がる」などの言い回しを，「給料」，「人気」，「物価」の単なる上下方向の移動としてではなく，量の多少として理解できるのは，私たち自身が“より多いは上”という図式を持っているからである。言換えれば，これらの言回しを意味あるものとしているのは“より多いは上”というイメージ図式である。そしてこのようなイメージ図式は，私たちが上に挙げたような様々な形での，環境と身体との相互作用をその起源とするのである。

●隠喩的投射（metaphorical projection）

Johnsonによれば，隠喩的投射とは，身体領域で形成されたイメージ図式による抽象領域の構造化のことである。即ち，「抽象的領域を組織するために，物理的経験の中に現れるパターンを，“隠喩”という形で使用する」ことである。言いかえれば“理解”とは身体経験と共に現れるパターンによって，新たな異なる領域に構造を与えることであり，この身体領域による抽象領域の構造化を，隠喩的投射と呼んだ（菅野，1992）。例えば，「人気が上がる」という現象，或いはその言い回しを，「人気」という抽象的な概念の上方への移動ではなく，量の拡大として理解できるのは，「積み木を積む」というような経験的・物理的領域で形成された“より多いは上”というイメージ図式によって，「人気」という抽象領域[1]が構造化されたためである。逆に，“より多いは上”というイメージ図式なくして，「人気が上がる」，「給料が上がる」，「物価が下がる」などの意味を“理解”することはできない。私たちが，世界を意味あるもの，秩序あるものとして理解しうるのも，反復から形成された図式による抽象領域の構造化，という隠喩的投射の働きによるのであり，この能力を想像力（imagination）[2]と呼んでいる（Johnson, 1987/1991）。

比喩的身振りに対する認知意味論的考察

●身振りは発話のどの部分に対応しているか？

一般的に身振り研究において「身振りはそれと同時に発現する発話と密接に対応している」，或いは，「身振りは発話のイメージを表している」，とは既に何度も述べられているところである。それでは，身振りはいったい発話のどの部分のイメージを表しているのだろうか。発話と身振りの具体例から考えてみたい。

発話１－A[3]　「日本語で言ったら想（そう）っていうか　想いが　はっす　$_1$放たれるとか　$_2$発するっていうふうにあの　漢字では書かれますけど」

（「発想」についての説明場面で）

1．，，BH-ISO, CE-MD, turn/UW_AB 〈2〉, [ ], mistake, ＋＋，[4]

2．，＋，BH-ISO, CE-MD, open/AB, [ ]，，，

発話２－A　「試すというほうに重きが置かれている試験と，検分するほうに重きが置かれている試験と，　あの，実際場面では２つというか，$_3$その間が，まぁ　$_4$段階に応じてあると思いますけど」

（「試験」についての説明場面で）

3．，，LH, CE-MD, cut 〈4〉-pass/OW__IW, [curved>90/IW-AB]，，＋＋，

4．，＋，LH, CE-MD, cut 〈2〉-pass/AB__TB, [curved＝90/IW-IW]，，，

まず，発話１－Aであるが，「放たれる」で発現する身振りは，胸の前で，手首を中心として両手の手のひらを回転させるような動作（turn）であった。その回転の方向は，上から聞き手方向へと向かう（UW__AB）回転であり，最終的には手のひらは上に向けられる。一方，「発する」では，いったん閉じられた両手が，胸の前で，聞き手方向に向かって（ＡＢ）すばやく開かれる（open），という動作が付随した。つまり，（想いが）「放たれる」では，回転と手のひらの向きによって，上方へ向かう運動が見られ，これは，手のひらが上方に向けられることによって解き放たれた何か（この場合は「想い」）が，上昇していくイメージを含んでいると考えられる。対照的に「発する」で見られた，聞き手の方に向かって素早く手のひらを開くという動作からは，「発する」が発話者本人を発信源として，水平方向に向かうベクトルとしてイメージされていることが分かる。

このように，「放たれる」は上方向のベクトルとして，「発する」は素早い動きを伴う水平方向のベクトルとして，演じ分けられているのである。そして驚くべきことに，この演じ分けは約

1.2秒間の間に行われているのである（①の身振りが始まってから，②の身振りが終了するまで）。このわずかな時間から考えても，それぞれの発話に対応した身振りの演じ分けが，意図的に行われているとは考えにくい。

次に，発話２－Ａであるが，ここでは，「その間」と「段階」の部分で身振りが発現している。まず，「その間」では，手刀を切るように手のひらを上から下へ降ろす（cut）という動作が，左から右へと少しずつその位置を変えながらが４回連続して生じている（cut〈4〉-pass/OW__IW）。一方，「段階」では，左手の親指を除く４本の指を直角に曲げてた形で，上から下へ降ろすという動作が２回連続するが，その位置は１回目は体正面で，２回目は１回目より手前で且つ下へわずかに位置を変えている。

ここで，話者Ａの試験に対する説明を図式的に記述するならば，『試験には，「試す」という極と「検分する」という極があり，実際の試験はこの２極の間のどこかに位置づけられ，「試す」という意味合いも，「検分する」という意味合いも両方持っているが，個々の試験ごとにその２極のどちらに重点が置かれるかは異なる』，という説明である。また，「その間」に付随する身振りは，左から右へと移動しながら，手刀で段階を区切ることで，このイメージを如実に表していると言える。

しかし，ここで注目すべきは，その後の「段階」に付随する身振りである。発話から考えて，「試す」極と「検分する」極は同レベルのカテゴリであり，どちらか一方が他方の上位概念というわけではない。このことは，身振りが体正面で水平方向の運動を含んでいることによっても示されていると考えられる。それゆえ，「その間」の「段階」は，発話の意味から言えば２極の間にあって，「段階」間に上下関係はないはずであり，左右に連続する空間を，手刀で切ってゆくその動作（身振り３）で既に表されているとも考えられる。それにもかかわらず，話者は「段階」という言葉が出現したとたんに，指を直角に折り曲げて水平にし（curved＝90/IW-IW），１回目より２回目が低くなる形で，空間を区切るように，まさに階段状の動作を示しているのである。

この身振りに現れた「段階」の階段状イメージは，「五段階評価」などに見られるように，いわば一般的な「段階」に対するイメージである。その意味では，話者Aが「段階」で示した身振りは，発話内容や発話文脈から切り離された一般的なイメージ，即ち字義的なイメージを示していると言えよう。ちなみに，ここでも身振り３が出現してから身振り４が完了するまでの時間は約1.7秒であった。

発話３－Ｂ　「ライバルは[5]相手との関係が最初じゃなくて　まず一つの目標なり　うーんまぁ　努力目標かなんかあって」　（親友とライバルの違いについて）

5．，，LH, LS-MD, pass/AB__TB C&G〈2〉, [curved>90/IW]，，＋＋，

発話４－Ｂ　「親友は　仲良しというか　[6]関係することがまず　第一の目的だから」
（親友とライバルの違いについて）

6．，，BH-ISO, LS-LW, pass/AB__TB C&G〈2〉, [curved>90/IW-DW]，，，

上の発話は，同一の話者Bが3－B，4－Bの順で述べたものである。ここで注目されるのは，「ライバル」と「親友」という異なる言葉についての説明場面において，付随する言葉が同じ（「関係」）ならば，話者方向と聞き手方向（pass/AB_TB）という往復する（C&G〈2〉）ベクトルを持つ同じ身振りが発現していることである。特に，発話3－Bでは，「相手との関係」がその直後に，「じゃなくて」で否定されている。話者Bの発話から考えると，「関係すること」は「親友」を特徴づける属性であって，「ライバル」を特徴づける属性ではない。が，にもかかわらず，「ライバル」の説明の中で「関係」という言葉が出現したとたんに，身振りは「関係する」ことを示す[5]。即ち，「関係」で共通する身振りは，発話の主題如何に関わらず，「関係する」という言葉に付随するものであることが分かる。

以上のことから，身振りはいったい発話のどの部分のイメージを表しているのか，という問題を考えてみよう。

まず最初に，話者は身振りによって，1.2秒という非常に短い時間にもかかわらず，「放たれる」，「発する」という単語のイメージの違いを正確に演じ分けていること。二つ目に，話者は，発話の全体的な意味内容とは必ずしも整合性を持たなくても，個別の単語のより一般的なイメージに添う形で身振りを形成すること。三つ目に，発話のテーマが異なる場合でも，同じ単語には同じ身振りが付随すること。これらのことから考えて，身振りが対応している発話の範囲は，単語，或いは句のレベルであるといえよう。

しかし身振りが表す発話の範囲の問題に関して，McNeill は「一つの節（一つの主語と一つの述語によって構成されたもの）に一つの身振りという原則が存在している」（McNeill, 1987/1990 p29）と述べている。即ち，一つの節が表現しているのは一つのイメージであり，その一つのイメージを身振りが表していると考えるものである（同 p31）。言い換えれば，節の単位を一つの身振りが対応している発話の範囲とみなすものである。このことから考えて，McNeill の言うイメージとは，「節で表されるイメージ」，即ち「主語と述語によって構成されるイメージ」で，動作主体とその動作主体の状態・運動を含んだ，全体的なイメージであると考えられる。

このような McNeill と筆者の観察事例の違いを生じさせた最大の理由は，発話内容，或いは説明すべき内容にあると考えられる。即ち，McNeill が用いたデータは，動作主体およびその状態・動作が明確に分かるアニメーションの説明場面の発話とその身振りである。一方筆者の用いたデータは，もともと動作主体があいまいな抽象的な言葉についての説明である[6]。以下が McNeill が用いたデータの典型的な例である。

And he goes up through the pipe this time[7]
（彼は，今度は，パイプを通って上に昇っていく。）
ジェスチャー：[手をすばやく上げて指を開く]
（McNeill, 1990「心理言語学」p29より引用）

この場合，動作主体，即ちアニメーションにおける主人公を身振りの中で表しているのは，手の存在そのものである。手が主人公を表し，手の動きが主人公の動きを表していると考えられる。この場合には，まさに身振りは主語と述語を含んだ節に対応しているといえるであろう。しかし，

そのように言えるのは，発話すべき内容において動作主体が明確である場合であり，筆者が用いた課題のように明確な動作主体の存在しない場合では，手が存在すること自体は何ものをも表現し得ないため，身振りとして主語と述語を持つような節は成立しない。よって発話内容がより抽象的で，発話の中に明確な動作主体が存在しないような場合，身振り（即ち比喩的身振り(metaphorical gestures)）が表現するのは，「関係する」，「発する」「放たれる」のような動作主体のない抽象的な語句単位に対応するイメージである，といえるのではないだろうか。

●身振りに見られるイメージ

・発話者間で共通する身振り

比喩的な身振りが，語句単位のイメージと対応しているならば，その身振りが表しているイメージとはどのようなものであろうか。この問題を考える上で，あるひとつの身振り，即ち先にも延べた，直線的な動作で，その方向は自分の体に向かう方向と聞き手の方向の2方向への往復という要素を持つ身振り，pass/AB_TB C&G に注目する。その理由として，非常に短い時間の中で複雑な様相を見せる身振りにおいて，この要素は比較的弁別が容易で，出現頻度も多いことがあげられる。

また，「発話に伴う身振り」という言い方に現れているように，ここまで，発話に付随する身振りという視点で，どのような発話にどのような身振りが付随するのかという方向から考えて来たが，ここでは，身振りの運動に焦点を当て，どのような運動要素を持つ身振りにどのような発話が付随しているか，という方向から身振りと発話の関係について考えてみる。

発話5－C：「親友って言うのは　もちろん自分と同じ位置にいることもあるんですけど，うーん　でも自分より$_{7}$高いところにいることもあって　で，

（中略）

親友は　うん　$_{8}$一緒に話し合うこともできるし$_{9}$憧れを持つ面もあるっていうそこが違うと思います」　（親友とライバルの違いについて）

7．,+, RH, CE-UW, turn/UW__AB, [ ], , ,

8．, ,BH-ISO, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈1〉, [curved0/DW-IW], , ++,

9．,+, RH, CE-UW, turn/UW__AB, [ ], , ,

発話6－D：「ライバルっていうと（中略）ただの競争相手っていうよりも　$_{10}$お互いを認め合って　あいつは俺のライバルだ　みたいな　つまり相手ができる奴だってことを認めた上で　自分のライバルだっていう言葉を使うことが多いような気がするから　そこに$_{11}$一種の信頼関係っていうか$_{12}$親密さがあるような気がするんですね」　（親友とライバル）

10. , , RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈2〉, [curved>90/TB], , ,

11. , , RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈2〉, [curved>90/TB], , ,

12. , , RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈2〉, [curved>90/TB], , ,

発話7－E：「人なつっこいというのは　人とよく話をして　打ち解けて　明るい[13]関係を作れる」（人懐っこいと馴れ馴れしい）

13. , , RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈1.5〉, [curved>90/me-IW], , ,

発話8－A：「ある段階を表す言葉でありますし（中略）共通認識として　[14]お互いにやり取りする時に　あの　ある概念として共有してるんだとおもいますけど」（発想について）

14. , , LH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈2〉, [curved90-elect(1)/IW-IW], , ,

発話9－F：「そういうこと（議論：筆者注）普通でやったら殴られるん決まっとるわけですね。普通でやったら殴られるん決まっとるんだけれど[15]先生と弟子関係ではそうはならない　そりゃ　圧倒的な[16]権力関係ですから　あの　逃げることができんわけですね」（授業にて）

15. , ,RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈2〉, [grasp/UW], , ,

16. , ,RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈1〉, [grasp/UW], , ,

ここで，pass/AB__TB C&G を共通の要素として含んでいる身振りに付随する言葉を見てみると，「やりとり」，「お互い」，「話し合う」，「関係」，「信頼関係」，「権力関係」，「親密さ」であった。もちろん，これらの言葉の全てでまったく同じ身振りが発現したわけではない。使用された手やその形，位置はそれぞれの身振りで異なっているが，その中に，「聞き手方向と話し手方向を往復する直線的な動作」が共通して見られたということである。次に，個々の言葉の字義的な意味を考えてみよう。

たがい[8] ［互］①相対する二つのものの双方。特に，自分と相手と（傍点筆者）。

互いの意味は，話者と聞き手の間を往復する身振り（pass/AB__TB C&G）が表す意味そのもののとほぼ同じである。多少比喩的に言えば，身振りの表す字義的な意味といえるだろう。

やりとり［やり取り］①　ものを取り交わすこと。交換。

上記のように，「やりとり」は往復運動をその意味の基盤としている。即ち往復運動が意味の中心をなしている。逆に往復運動を伴わなければ「やり取り」は成立せず，それを「やり取り」とは言わないのである。

はなしあう［話し合う］①　いっしょに話をする。
②　物事を相談する。

これも，双方向的な発話行為を指すものである。同じ発話行為であっても，聞き手に対して一方的に話し掛ける「演説」，「講演」などと比較してみても分かるように，「話し合い」とは最低二人以上の人間がいて，双方が話し手でもあり聞き手でもあるという状況であり，発話行為の中の双方向的な要素が，その意味の中核をなしている。ここでも，逆に双方向的運動要素がなければ「話し合い」とは言えない。つまり，情報や心情などが，二者間で「やり取り」されることが「話し合い」の意味を支える中心概念といえる。

かんけい（する）［関係］①　二つ以上の物事が関わりあっていること。かかわりあい。
②　男女の間で性交渉を持つこと。

（**かかわる**［係わる・関わる］①　関係する。つながりがある。）

字義的に言えば，「関係する」こととは関わりがあることであり，つながることである。そしてこのようなつながりを維持するもの，つながりを媒介するものが物質，情報，心情などであり，言い換えれば「関係」とはこれらの物質，情報，心情などの「やり取り」があって初めて成立するものと考えられる。さらに物質，情報，心情の「やり取り」によって「権力関係」は維持され，或いは「信頼関係」が生まれ，「親密」な関係へと発展するのである。すなわち，何らかの双方向的交流がなければ「信頼関係」にせよ，「権力関係」にせよ，関係は成立せず，それを「関係」とは呼ばない。ここでもやはり，「関係」の意味を支えるものが二者間の「やり取り」，即ち往復運動で示されるような双方向のベクトルであることが分かる。

以上のように，共通の要素を持つ身振りと共に発話された，「お互いに」，「やり取り」，「話し合う」，「関係する」，「信頼関係」，「権力関係」，「親密さ」という言葉は，その意味の基盤に何らかの形で双方向的な往復運動の要素を持っていることが分かる。それは，「お互い」，「やり取り」，「話し合い」，「関係」，「親密さ」という言葉の凝集性を支える部分であり，これらの言葉を一つのカテゴリーにまとめる核となるイメージと言い換えることもできよう。そして，身振りとして現れるのは，その意味の基盤であるイメージ図式，即ち往復運動図式なのである。発話に伴う身振りは，その身振りとともに発現する言葉のイメージ図式を具体的に示したものと言えよう。更に，先の発話例「放たれる」，「発する」に付随した身振りも，それぞれのイメージ図式に従って，上方へのゆっくりした運動と，水平方向への急激な運動と，演じ分けられた

ものと言えよう。

更に重要なことは，「お互い」，「やり取り」，「話し合う」，「関係」などの言葉に関して，これらに付随する身振りが異なる話者で共通していることである。このことは，異なる話者間で共通のイメージ図式を共有していることを示すものであり，イメージ図式が言葉の意味の基盤をなすものであることを考えれば，身振りに現れているのはコミュニケーションが成立する基盤であり，更にその基盤が身体領域に根差したものであることを示しているのではないだろうか。

・一つの言葉に異なる身振り

ここまで，特定の動作を共通項として持つ身振りから，それに付随する言葉について検討してきたが，逆に言葉から身ぶりを見た場合，その言葉に付随する身振りが必ずしも固定されているわけではない。例えば，先に挙げた「関係する」という言葉であるが，多くの場合，前述の聞き手－話し手方向の往復運動（pass/AB__TB C&G）が見られるが，以下のように発話文脈によっては異なる身振りが出現することもある。

発話10－G　「たとえば，幼い時の信仰という　信頼 trust というのと　それから年寄りの時の ego-integrity はですね　17非常に強い関係がある？？？？[9] エリクソンいってます。　僕はそれはよく分かりません」　（授業にて）

17. , , RH, CE-MD , pass/IW__OW C&G 〈10〉, [curved>90/DW], , , ,

この発話例の場合，身振りは比較的長い時間発現しているので，必ずしも身振りがどの部分の発話と関連があるのか明確ではないが，発話内容から考えて，おそらく「関係」と関連していると思われる。この時，身振りは右手で，胸の前で左右に往復する動作を行っており（pass/IW__OW C&G），先に述べた「関係する」とは，ベクトルの方向が異なっている。そこで，発話内容に注目してみると，ここで表されている「関係」とは，「幼い時の信仰という 信頼 trust」と「年寄りの時の ego-integrity」との「関係」である。言い換えれば，第3項同士，事物と事物の関係を指すものである。一方，前述した「関係する」，「信頼関係」，「権力関係」，「親密さ」はすべて人と人との関係である。人間関係の場合には話者－聞き手間[10] の往復運動が発現し，事物と事物の関係の場合には左右の往復運動が発現するのである。この往復運動の方向の違いは何を意味するのであろうか。

ここで考えられるのは，その「関係」に対する話者の視点の違いが反映されているということである。つまり，事物同士の関係の場合，話者はその関係の外側に立って両方の事物から等距離の位置し，その関係を第三者として眺めるような視点が左右の往復運動という身振りに現れており，一方人間関係の場合には，「私－あなた」という「関係」を構成する当事者としての視点が話者－聞き手方向の往復運動として身振りの中に現れている，と考えられるのではないだろうか。たとえば，互いに関係する2つの事物を扱うとき，或いはその関係自身を対象とする時，左右に並べて扱うのが“自然”であろう[11]。一方人間関係の場合，語られる内容が必

ずしも話者本人が当事者でなく，（具体的事実に対応しないという意味で）一般的・抽象的な人間関係について語られている場合であっても，それが人間同士の関係を表す内容であるなら，そこで発現する身振りは，話者－聞き手方向の運動として現れる。人間の関係について語られる場合の「関係」は，まさに話者自身の身体のある場所を起点として他者との関係が身振りで示されており，人と「関係する」ことのイメージ図式そのものを表していると言えよう。

まとめると，２つの「関係」で共通する部分は，“二つのものを結ぶ往復運動”であり，関係の種類或いは，その関係に対する話者の視点の違いが往復運動の方向の違いとして現れたといえる。言い換えればこのような身振りの違いは，「関係する」の字義的な意味（①二つ以上の物事が関わりあっていること。②男女の間で性交渉を持つこと）を見ても分かるように，その語の意味の差異，即ち語彙の多義性に対応したものといえるのではないだろうか。

●身振りに見られる隠喩的投射

・一人の話者の一連の発話で共通する身振

前節では，異なる話者によって生成された身振りの中で共通の要素を持つ身振りに焦点を当て，それらの身振りが表しているのはその身振りに付随する言葉のイメージ図式であることを述べた。ここでは，一話者の一連の発話の中で，異なる言葉に対して単に一部の要素が共通であるだけでなく，全く同じ身振りが発現するという現象に焦点を当て，その意味について検討する。

発話５－Ｃ：「親友って言うのは　もちろん自分と同じ位置にいることもあるんですけど，
うーん　でも自分より$_{7}$高いところにいることもあって　で，
（中略）
親友は　うん　$_{8}$一緒に話し合うこともできるし$_{9}$憧れを持つ面もあるっていうそこが違うと思います」（親友とライバルの違いについて）

７．,+, RH, CE-UW, turn/UW__AB, [ ], , ,

８．, ,BH-ISO, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈1〉, [curved0/DW-IW], , ++,

９．,+, RH, CE-UW, turn/UW__AB, [ ], , ,

発話５－Ｃでは，「高い」ところと「憧れ」という言葉について全く同じ身振りが発現しており，その身振りの位置は体の正面，目の高さで，運動の種類は右手の掌を返す（手を話し手方向から上を通って聞き手方向へ回転させるて最終的に掌は上方を向く）というものである。これまで考察してきたように，身振りに現れるものが，言葉のイメージ図式であるならば，一話者の一連の発話の中で異なる言葉に全く同じ身振りが発現したという事は，異なる二つの言葉に共通のイメージ図式が該当する事を示していると言えよう。

ここでまず，「高い」を見てみると，その身振りの発現する位置は目の高さより上という，

かなり高い位置で行われている。手のひらを返すという運動も，最終的に手のひらが上に向けられるということも上方向のベクトルを示すものである。その意味では，「高い」という言葉に付随して表れる，上方を志向する身振りは，いわばかなり“字義的な”身振りと言えよう。言い換えれば，「高い」という言葉の物理領域，身体領域と直接関連する意味を表す身振りである。この「高い」と全く同じ身振りが「憧れ」に付随して発現していることは非常に興味深い。憧れる対象は，憧れる主体（話者）にとってポジティブに意味付けられているものである。そして，上下の方向で言えば，ポジティブな意味を持つものは，上方向に位置づけられる[12]（Taylor, J. R., 1995/1996, p165)。いわば，「憧れる」という抽象的な事象は，「上方向を志向する」，「上に向かう」，という図式によって構造化されているのである。即ち一連の発話の中で，「高い」と「憧れ」で同じ身振りが発現したということは，「憧れ」という抽象領域が「高い」という身体的・物理的領域からの隠喩的投射によって構造化されていることを示しているのではないだろうか。一連の発話の中で，「憧れ」は「高い」ところを志向するという物理領域を基盤として意味付けられ，理解されているのである。

これと同じ隠喩的投射が発話6－Cにもみられる。

発話6－D：「ライバルっていうと（中略）ただの競争相手っていうよりも $_{10}$お互いを認め合って　あいつは俺のライバルだ　みたいな　つまり相手ができる奴だってことを認めた上で　自分のライバルだっていう言葉を使うことが多いような気がするから　そこに$_{11}$一種の信頼関係っていうか$_{12}$親密さがあるような気がするんですね」（親友とライバル）

10. , , RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈2〉, [curved>90/TB], , ,

11. , , RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈2〉, [curved>90/TB], , ,

12. , , RH, CE-MD, pass/AB__TB C&G 〈2〉, [curved>90/TB], , ,

「お互い」，「信頼関係」，「親密さ」で全く同じ身振りが発現している。即ちここでも，一連の発話の中で，「お互い」という物理的・身体的領域から「信頼関係」，「親密さ」というより抽象的な領域へ，という方向で，身振りとしての隠喩的投射を見て取ることができるのである。さらに，話者は異なるものの，先に挙げた「やり取り」，「お互い」，「関係」，「信頼関係」，「権力関係」，「親密さ」などで共通の身振り要素を持つのも，隠喩的投射の働きと考えられるのである。

また，発話5－Cに関して，更にもう一つ興味深いことは，「自分より高いところ」「憧れをもつ」ことが，話者の目の高さを基準として，身振りに現れていることである。即ち「自分より高い」や「憧れ」は目の高さより上の位置で表現されるのである。これとは対照的に「憧れを持つ」の直前の「（親友と）一緒に話し合うこともできる」では，身振りは胸の前の位置で発現しており，胸から首の高さが対等な関係を表す位置として用いられている。「目上」，「目

下」の言回しにも示されるように，順位関係を示す言葉に対応する身振りが，実際に話者自身の目を基準としていること，即ち自分の目の高さより上にいるものを優位なものとしているということは，言葉の意味の基盤が身体にあることを如実に示しているのではないだろうか。

●残された問題点とまとめ

・対応する言葉を伴わない身振り

ここまで，発話に伴って発現する身振り，特に表象的身振りの中の隠喩的身振りにおいて，その身振りの表す内容が単語，或いは語句を単位としたものであること，その身振りは対応する言葉の意味の基盤をなすイメージ，即ちイメージ図式が具体的動作となって現れたものであること，更に，一連の発話において，身振りの中に，身体的・物理的領域から抽象領域への隠喩的投射が見られること，を明らかにしてきた。しかし，当然のことながら，多様な様相を見せる身振りは，上記のようなイメージ図式とその隠喩的投射だけでは説明できないものも多い。これまで，身振りとそれに付随する言葉の意味との関連を検討することで説明を行ってきたわけであるが，身振りの中には必ずしも対応する言葉が明確でない場合も多い。このような場合，身振りが何を表しているか，身振りと言葉の関連はどのようなものなのかを説明することは極めて困難である。しかし，そのような発話との関連が明確でない身振りも，発話の文脈からある程度推測可能なものも存在する。本節ではそのような身振りのいくつかを紹介し，可能な限り妥当な説明を試みてみたい。

以下に示したのは，発話に先行する身振りである。

発話11－H「慣れの度合いが少ない刺激に対して　近づいて行こうってする態度が　積極的で　とりあえず[18]慣れない刺激に対しては　自分を守ろう　避けようとする態度が消極的かなぁ　と思います」（積極的と消極的）

18. , , BH-ISO, CE-MD, ,[curved>90/TB-IW], , ,
（指が胸の前で少し重なる）

発話11－Hで発現する身振りは，手のひらを自分（話者）の体のほうに向けて，両手の指先のみを重ねあわせるような動作であった。これはその発話から考えて，「自分を守る」ことを表した身振りであろうと考えられるが，身振りが発現したのは「慣れない刺激に対しては」の発話部分であった。即ち，身振り動作が終了した後にそれに付随すると思われる言葉が発現している。このことから身振りは，それと同時に発現する発話のイメージ図式を表すとは必ずしも言えないのである。

このような，身振りと発話のずれは，文法に則って時系列で表現されねばならない発話と，表現様式に規制のない身振りとのずれが現れたものと考えられる。即ち，身振りが発現している時点で話者はすでに「自分を守る」イメージを形成しているが，「守る」という動詞が，「○○に対して（守る）」或いは「○○から（守る）」という副詞句を必要とし，その副詞句以降にしか発現できなかったため，身振りが先走る形で発話と身振りにずれが生じたものと思われる。

言換えれば，McNeill がいうように，話者には発話の核になるような中心的なイメージ（growth point）から発生した発話と身振りという2つの modality の表現における制約の違いが，時間的なずれを生じさせたと考えられる（McNeill, 1987/1992）。

上の例は，身振りに対応すると思われる発話が，時間的なずれはあるものの明確に発現した場合であるが，以下に示すように身振りでは発現していながら，それに対応する発話が省略されてしまう場合がある。

発話12－Ⅰ　「こいつにだけは負けたくない　みたいなライバルももちろん存在するわけで　うーんと　そういう場合は　あのぉ　まぁ　しん　し　親友になるには　ほんのちょっと$_{19}$ひっくり返ればいいだけなんだけれども$_{20}$ならない」

（親友とライバル）

19. , ,RH, CE-MD, turn/UW__AB, [hold<90(12)/IW], , ,

20. , ,RH, CE-MD, turn/UW__AB, [hold<90(12)/IW], , ,

ここで注目すべきは，発話12－Ⅰにおいて身振り19と20は全く同じ身振り（右手の人差指と親指で“U字型”を作り，手前から聞き手方向へ回転させる動作）が発現していることである。身振り19では，発話から考えて，「ひっくり返る」ことが回転で示されていると思われるが，身振り20では身振りに対応する言葉がない。これは恐らく，「ほんのちょっと　ひっくり返ればいいだけなんだけれども　ひっくり返らない」の「ひっくりかえ」（波線の部分）が省略されて「ならない」と発話されたのであろう。とすれば，「ならない」で発現した身振りは，省略されて実際には発話されたなかった言葉に対応する身振りが現れていたわけである。

発話13－G　「自分の存在にですねぇ　$_{21}$『yes』って言えたらですねぇ　危機を克服できた？？言えるわけです。　で，$_{22}$自分の存在にですねぇ　他のひ？他の人が認めてくれなくてもですね　自分自身で自分の存在に$_{23}$『yes』って言えた，っていうときにですね　どういう力が身についているかって言ったら ego-integrity という力が身についている　とですねぇ　エリクソンが言ってるんですねぇ」

21. ,＋ , BH-ISO, CE-MD, turn/DW__AB, [curved>90/DW-IW], , ,
22. ,＋ , BH-ISO, CE-MD, turn/DW__AB, [curved>90/DW-IW], , ,
23. ,＋ , BH-ISO, CE-MD, turn/DW__AB, [curved>90/DW-IW], , ,

発話13－Gでは，3回同じ身振りが発現している。その内の身振り21,23は同じ発話「yes」が付随しているが，身振り22は，21，23と同じ身振りが「自分の存在に」という発話に付随している。このように身振りが発現した部分の発話だけを見れば，一連の発話の中で，一つの身

振りに異なる発話が付随しているように見える。それでは前述のように，先に述べられた言葉のイメージ図式が「yes」から「自分の存在」に隠喩的に投射されたものと言えるのだろうか。ここで，21，23の身振りについてその直前の発話を見ると，21，23共に「自分の存在」という言葉が共通であり，身振22が付随する発話と同じである。このことから考えて，身振り22は，本来なら「yesと言う」に付随するものであるが，その直前の「自分の存在に」で発現し，なおかつその後に続くはずであった「yes と言う」が，「他の人が認めてくれなくても」という副詞句が挿入されたことで，省略されたものと考えられるのではないだろうか。その意味では，身振り21，23と22は，異なる言葉における隠喩的投射が現れたものではなく，発話11に見られるような，身振りの先走りと発話12に見られるような身振りが付随すべき発話の省略が同時に起こった例と言えるだろう。

・まとめ

本論では，主に比喩的な身振りが発話の意味とどのように関連しているか，即ち身振りに現れてくるものは，発話の意味とどのように関連しているかを認知意味論の視点から考察してきた。その中で，比喩的な身振りは発話の語句を単位とするイメージに対応しており，その身振りの中には，それに付随する語句のイメージ図式が現れていると考えられる。また，一連の発話において，一つ身振りが異なる語句に用いられる場合，二つの語句の間にイメージ図式の隠喩的投射が行われていると考えられる。しかし，上記の三つの例で示されたように，関連すると思われる発話と身振りの現われ方は様々であり，発話と身振りを単に同時的に発現するというような時間を指標として関連付けることはできない。更に問題となるのは，発話12－Ｉのように，実際の発話として発現しない言葉の身振りまで現れるという現象は，「身振りで表されるものは発話された言葉のイメージ図式である」という説明だけでは十分でない。

また，本論では，多様な現われ方をする身振りの中の，比喩的身振りを中心として検討してきたが，全ての身振りがイメージ図式として説明可能なわけではない。現在のところ，この認知意味論的な考察は，比較的抽象的な言葉に付随する身振りでのみ可能であり，具体的なものの形状や具体的な映像場面の説明時に発現する身振りまで敷延可能か否かは，今後検討すべき問題である。また，本論は身振りと発話との関連についての一つの側面について述べたものであるが，筆者が観察した限られた事例をもとにトピック的に考察したものであり，後づけ的解釈の批判を免れない面もあろう。身振りが，発話の瞬間瞬間の中で生成され，話者のイメージとそれ対する話者の視点，発話内容の文法構造，話者が利用可能な語彙など，様々な要因によって変容する身振りとその発話との関連を検討するためには，身振り要素ごとに一定の規則に則った形でより多くの身振りと発話を収集してし，比較検討することが必要であろう。

註

1）もちろん「人気が上がる」に働く図式は「より多いは上」とう図式だけでなく，「物理的な量」に関する図式も同様に働いている。すなわち，人気のような心情を物理的な量として理解することであり，ここでも，物質に対して用いられる量という図式が，抽象的な心情に対して投射されたと考えることができる。例えば，「溢れる思い」，「大きな愛」などは同様の投射から生じる言い回しで

あろう。

2）M. Johnson, G. Lakoff 共に，隠喩的投射，比喩の生成，想像力に関して，それがどのようにして起こるのかについて説明していない。この点に関して，神経生理学的な視点から補足しているのが G. M. Edelman の神経細胞群淘汰理論（TNGS）である。Edelman による，認知意味論に対する考察は，G. M. Edelman（1992/1995）を参照のこと。また，TNGS に基づいた発達的視点から概念形成における認知意味論に対する考察は，Thelen, E. & Smith, L. B.（1994, p321）を参照のこと。

3）「発話」に割り振られた記号は，数字部分が本論文全体を通して付けられる通し番号。アルファベット部分が発話者を示す。複数の発話で，アルファベット記号が同じであれば通し番号に関わらず発話者が同じであることを示す。

4）ここに書かれた記号は，上の発話の下線が引かれた部分で発現した身振りをコード化したものである。コード化規則については，西尾（1997）を参照のこと。

5）直線的で，話者に向かう方向と聞き手に向かう方向を往復するベクトルを持つ身振り，すなわち pass/AB_TB は「お互い」，「やり取り」，「関係する」などという言葉と関連して出現する身振りである。この身振りに関しては後に議論する。

6）McNeill の場合，被験者は短いアニメーションを見て，その後，その内容を知らない人に説明する，という課題で発現した発話と身振り。一方，筆者の場合，「人懐っこいと馴れ馴れしいの違い」，「親友とライバルの違い」，「発想」，「程度」など，言葉の説明課題で発現した発話と身振りである。

7）下線部のところで身振りが発現している。

8）以下の，言葉の字義的な意味は「国語辞典」福武書店から引用した。

9）発話例において“？”は，記録されたビデオデータから筆者が聞き取れなかった部分を示す。

10）この場合の話者－聞き手方向とは，必ずしも自分と目の前の聞き手を意図したもの，或いは自分と聞き手を指したものではなく，あくまでも体の正面方向という意味。

11）おそらくこの“自然さ”は，私たちの体が左右に対称であること，即ち事物を扱う手が左右対称であることに起因するものと考えられる。

12）例えば「人気が上がる」，「地位が上がる」，「徳の高い」，「上様」，「目上」，「high life（（上流社会の）贅沢な暮らし）」，「high sprit（上機嫌）」など“Good is up”の図式は普段の言い回しの中に容易に見出される。

引用文献

Edelman, G. M.（1995）脳から心へ（金子隆芳訳）．東京：新曜社（Edelman, G. M.（1992）Bright air, brilliant fire : On the matter of the mind. New York : BasicBooks）

Johnson, M.（1991）．心のなかの身体．（菅野盾樹・中村雅之，訳）．東京：紀伊国屋書店．（Johnson, M.（1987）. The body in the mind. Chicago: The University of Chicago.）

Kita, S.（1993）Language and thought interface: a study of spontaneous gestures and Japanese mimetics. Ph. D. dissertation. University of Chicago.

Lakoff, G.（1993）認知意味論．（池上嘉彦・河上誓作他，訳）．東京：紀伊国屋書店．（Lakoff, G.（1987）Women, Fire, And Dangerous Things. Chicago: The University of Chicago.）

Lakoff, G., & Johnson, M.（1986）．レトリックと人生．（渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸，訳）．東京：大修館書店．（Lakoff, G., & Johnson, M.（1980）. Metaphors we live by. Chicago: The University of Chicago）

McNeill, D.（1990）言語心理学（鹿取廣人他訳）．東京：サイエンス社．（McNeil, D.（1987）Psycholinguistics: A new approach. New York: Harper & Row）

McNeill, D.（1992）Hand and mind. Chicago and London: The University of Chicago Press.

西尾新（1997）発話に伴う身振りの表記法作成の試み．京都大学教育学部紀要，43，149-160.

Rauscher, F. H., Krauss, R. M., and Chen, Y.（1996）Gesture, speech, and lexical access:

the role of lexical muvements in speech production. Psychological Science, 7, 226-230.
菅野盾樹（1992）はじめにイメージがあった。Imago, Vol. 3(6), 204-213.
Taylor, J. R.（1996）認知言語学のための14章（辻幸夫訳）. 東京：紀伊国屋書店.（Taylor, J. R.（1995）Linguistic categorization: Prototypes in linguistic theory. Oxford: Oxford University Press）
辻幸夫（1997）認知科学から見た意味. 言語. Vol. 26, No. 10, 60-68.